

佐波理の鏡

會田富

著者略歴

會田 富康 (あいだ とみやす)

本姓 伊原明治郎

一九〇一年 千葉県館山に生まれる。

日展評議員

工彩会会長

日本日記クラブ副会長

著作

「日本古印新放」 會津八一博士監修
東洋美術叢刊 (宝雲舎刊)

「鍔金・彫金・鍛金」 (理工学社刊)

その他、隨筆、紀行など。

現住所 東京都世田谷区上祖師谷一―六―一九



佐波理の鏡

一九七七年八月五日 第一版発行

著作者 會田 富康

発行者 中川 乃信

發行所 理工学社

東京都文京区本駒込五丁目九番一〇号
電話東京〇三(八二八)五二二一(代表)
振替口座東京一一三四六七六番(千二二三)

印刷 第一印刷(株)

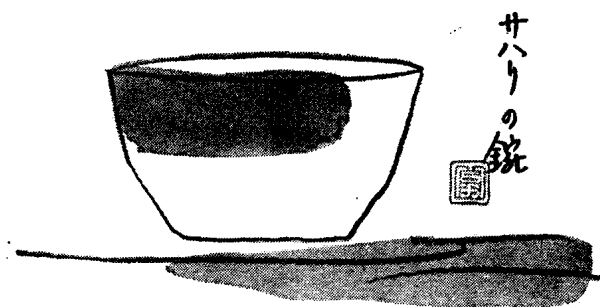
製本 秋田製本所

佐波理の鏡

會田富康

目

次



I

大泉坊	13
伊勢の塩田さん	16
上総の鋳物師	21
福知山	27
四王寺印	32
「漢委奴国王」印	36
湯河原の保善院鐘	41
印の吉凶	44
仏器の話	48
住吉如慶の職人尽の下絵	56
河鍋曉斎の絵日記	60
太田蜀山人の判取帳	65
金瓶梅の稿本	77

奉加帳 80

漱石の手紙 86

Ⅱ

結城素明先生 91

逍遙書屋の日記 95

河竹繁俊先生 114

竹清、三村清三郎先生の思い出の日記 117

安田靱彦先生と「大和古印」 134

會津八一先生と「日本古印新攷」 144

久米正雄さんのストープ 152

Ⅲ

強盗 159

北海道の食べ物 163

良ちゃん	166
大地震	172
帝展初入選	178
早稲田大学出版部	180
ある日の思い出	184
買い出し	186
釣り	191
戦争	196
お袋の墓参	198
湯沢の雪	202
日展	206
五島と天草	213
佐波理の鏡	224
小唄	226
石売り	229

伊勢海老のさしみ	233
鑄のこり	235
仕事	237
差	240
夢のものさし	243
あとがき	245

佐波理の錠

装幀 伊原道夫

I



大泉坊

金印発掘の志賀島の対岸に当たる今津に、大泉坊があります。

昭和九年五月二十五日、博多の伊藤善記さんの案内で、この大泉坊へ出かけたのです。予め木下讚太郎さんという郷土史家の名刺をもらって行きました。

博多湾の中に浮かぶ残島（のこのしま）を見ながら、元寇防塁の石垣に添って今津村に十一時近くに着いたのです。大泉坊の御住持さんは畑仕事のためお留守でしたが、間もなく帰られたのでいろいろとお話をうかがうことができました。

もともと大泉坊は誓願寺の一支院で、昔は四十二坊もあったという巨刹でしたが、いまではこの大泉坊を一つ残すだけです。寺院という姿ではありませんが集蔵する什物はみごとにたものが多く、中には国宝指定のものもあっていかにも名刹の過去を物語るものがありました。金工品では国宝の「呉越国王錢弘敬造八万四千宝塔乙卯歲記」と銘のある八万四千塔が一基、これは那智山発掘、山城金胎寺蔵、河内金剛寺のものと同一のものです。このほか金工のもので竜、霊鳥を配した九鈷鈴、九鈷杵及び盤などがありました。漆のも

のでは沈金の経宮で蓋裏に「延祐二年杭州油局棟梁神王橋金家造」の銘文が見えました。これは尾道の浄土寺のものと同形式であると思いましたが、この経宮は蓋と身とは別のものでしたが、いくつかある中の上下が取り替わって違ったものでしょう。大きさは横三百六十五ミリ、幅二百二十ミリ、高さ二百五十五ミリありました。写経は法華経八卷、文書は「誓願寺創建縁起」栄西筆の「誓願寺孟蘭盆縁起」などがありました。

これらを拝見してから、御本尊の薬師如来を拝見しました。回りの十二神将がぎわ立ってカラフルなおたずねしてみると、あまり古くて汚れているのでペンキ絵の具を塗ってきれいにしたとのことでした。これにはちょっと恐縮しました。

さてそれからお庫に案内されました。庫といっても失礼ながら名ばかりのお庫で、風も吹きぬけ雨もするただの板ぶき小屋でした。力を入れて上がれば踏み折れそうな階段を上がって、天井のない屋根裏の如きところへ上がりました。

ここでアッ！ と声を吞みました。驚かざるを得ない光景だからです。それは、夥しい木彫の小仏像が累々と折り重なっていたからです。これはもったいないと叫び声が出ました。この小仏像はさまざまの姿をしたもので、如来の如き菩薩の如きまたは天部、神像の如き多種のもので、それに附随する光背や蓮座、岩座等も大小さまざまなのです。光背

の形は舟光背が多く、色彩も凹みの所に残っているなど、これはこれとは啞然たるものでした。永い間いわば風雨にさらされていたので、さし込みの手などは抜けているものばかりでした。この像の大きさはだいたい百五十ミリ前後のものばかりでしたが、中には二百五十ミリ近いのもあり、さまざまでした。制作年代は南北朝から足利期頃と思いました。そしていったいこの仏像は何のために作られたものであろうか、千体仏ではないし何か飾るための仏像であろうことは想像されましたが、果たして何仏と称するものか、見当がつきませんでした。

この日、私と偶然いっしょであった県の地方課長藤本某氏に、こうした文化財は県の力で保護されるようにと進言しておいたのです。帰りに下さるというので私もこの仏像を十五、六体頂戴して来て、今日でも仏壇に置いて礼拝していますが、その後何十年たったいまに至るもこの仏像の後日物語りを聞いていません。

さて数日たって帰京後、小野玄妙先生にお会いしたときこの仏像の話が出たのですが、玄妙先生もこうした仏像はまだ見ていない、恐らく曼陀羅仏とでもいったほうが近いものでしょうとのお話でした。

その後昭和三十一年十二月一日に九州五島の福江市で佐々野観光課長さんに案内され、